

第5問 以下の問1～問3に答えなさい。

あるお母さんが2歳の男の子をつれて相談のために来室しました。お母さんは子供が広汎性発達障害ではないかと思っています。

問1. 男の子が広汎性発達障害であるかどうかを見立てるためにはどのようなことをお母さんから聞き取ることが必要かをできる限り述べなさい。

問2. 同席している男の子の様子を観察するときにどのような視点が必要か述べなさい。

問3. 面接の結果、広汎性発達障害が疑われるときに何をすることができるのかを述べなさい。

第1問 社会参加をせずに自宅を中心とした生活を長期間続けている状態は、「ひきこもり」と呼ばれています。臨床心理士として働く上で、「ひきこもり」への支援は避けては通れない課題となっています。こうした「ひきこもり」に関して、以下の点について論じなさい。

問1. 「ひきこもり」の特徴として、数年以上にわたって遷延化することがあげられます。「ひきこもり」が長期化する心理的メカニズムについて論じなさい。

問2. 臨床心理士が行う4つの業務を踏まえて、臨床心理士として「ひきこもり」にどのように関わることができるかについて論じなさい。

第2問 以下の文章を読み、(1)～(20)に当てはまる用語を下記から選び、その記号を解答欄に記入しなさい。

1. 要素あるいは部分に対して全体を優先する見方は古代ギリシャの哲学者(1)が述べている。この考え方は(2)という概念にまとめられ、心理学の革新的理論へと発展した。(2)の流れを汲む(3)は仮現運動の研究を行った。また、(4)はチンパンジーが天井からぶら下がったバナナを取る方法を観察し、この学習方法を(5)と呼んだ。他に(2)において、物理学から場理論の考え方を導入した(6)は、場の概念を人間に集団行動に応用し、(7)の概念を産み出した。(7)はその後感受性訓練に応用されている。このように(2)は、新行動主義の学習理論、社会心理学、臨床心理学などに広く影響を及ぼしている。

2. (2)はドイツを中心に発展したが、ほぼ同じ時期、フランスで最初に心理学実験室を開いた(8)は子どもの知能に関心を抱き、知能検査を開発した。知能検査の結果を表す方法として知能指数を提唱したのは(9)である。知能指数を実際の知能検査の結果表現に組み込んだのが、(8)の知能検査のアメリカ版を作った(9)であった。知能検査が成人に使用されることが増加する中で知能偏差値という概念を取り入れたのが、(10)である。

3. 知能検査は知能を測定する道具として開発されたが、知能の概念は明確とは言えない。知能についての代表的考えに(11)の2因子説がある。(11)の考えに対して複数の群因子を仮定する考えを提唱したのが(12)であった。(13)と(14)は階層群因子モデルを仮定し、(15)と(16)に分類した。このモデルから(10)は自らが開発した知能検査で結果を(17)と(18)に分けた。(10)は幼児用、児童用、成人用の知能検査を開発した。

4. 知能の発達について、1970年代までは成人期になると衰退していくと考えられていた。これは(19)というデータ収集とその解釈法から生じたものであった。その後、別のデータ収集法による研究から知能は成人期以降も発達することが示され、(20)はこの2つのデータ収集法を組合せた横断系列法から、(15)のピークは60歳位であり、(16)のピークは40歳位であると報告している。

選択項目欄

イ Aristotle	ロ Binet, A.	ハ Cattell, R.B.	ニ Hippocrates	ホ Horn, J.L.	ヘ Kaufman, A.S.	ト Köhler, W.
チ Lewin, K.	リ Spearman, C.E.	ス Simon, T.	ル Shaie, K.W.	オ Terman, L.M.	リ Thurstone, L.L.	
カ Wechsler, D.	コ Wertheimer, M.	ク 横断データ	ケ グループダイナミクス			
リ ゲシュタルト理論	リ 結晶性知能	ネ 言語性知能指数	ナ 実験法	ウ 試行錯誤学習		
ム 全検査知能指数	ウ 動作性知能指数	ノ 洞察学習	ク 流動性知能			